

日本文學史概說(二)

平
安
時
代

池
田
龜
鑑

目次

はしがき

序説

- 一 成長の時代——支那文學流行の時代——空海を中心として……………五
- 二 完成の時代——和歌興隆の時代——貫之を中心として……………三
- 三 爛熟の時代——物語文學全盛の時代——御堂關白を中心として……………二
- 四 分裂の時代——文藝批評勃興の時代——六條家を中心として……………六

はしがき——日本文学史に於ては、少くとも三つの態度が可能である。その一は、作品・作家に互る根本資料への實證的な究明であつて、これは書誌學又は評傳を構成する。その二は、作品・作家の有する特殊の型タイプ又は主義イデオロギイへの客觀的考察であつて、文藝形態學又は思潮論を構成する。その三は、文學的原理の普遍性の存在を假定して、是が客觀的性質を追求規定する態度であつて、觀念論的文化史又は美史を構成する。本稿は、しかし、以上の三つの中のいづれにも屬しない。むしろ文學を社會的存在と考へ、文學的思想形態の觀念をうち樹て、出來得るかぎり嚴密なる實證主義的方法によつて、その本質を明かにしようとする。即ち平安朝文學思想は、平安朝社會思想の一面に外ならぬと考へ、單に文學作品のみに限らず、あらゆる文化活動の全面に互つて、そこに反映せる文學的精神の社會的形態と性質とを把握しようとするものである。實は本稿は、ある所での今年度の講義「平安朝文學史」中の「序説」の部分を少補したもので、精細なる解説はたうていこの紙面には許されなかつた。従つて本稿に於ては、むしろ平安朝文化の雑多と紛糾とを、出來得るかぎりの圖表的簡明さに於て、再整理しようとした努力が主なる特色をなすのである。なほ文學的思想形態の觀念の理論的な基礎に關しては、昭和五年四月「思想」特輯號所載の拙稿を一讀せられたい。

序 説

平安朝の文學思想に於て、特に著しい文化史上の特質は、宮廷又は貴族を中心とする文化が成長し完成して、爛熟の頂點に達し、やがて矛盾と倦怠とを胎内に醸して分裂崩壊する過程が、明かに文學の思想上に指摘せられ得ること

である。この事實は、上代に於ても、中世・近世に於ても、等しく存在する事實であるが、この時代に於て特に著しいものを見るのである。即ち成長・完成・頽廢・分裂の過程を辿る文學の思想形態が、その各々の過程に於て特殊の性質と様式とを示現しつつ、他の一般社會的精神の諸形態と、完全に一致合流してゐるといふ事實が、平安朝時代に於て特に明白に認められ得るのである。

平安朝の文化は、これを政治・經濟・風俗・教育・宗教・道德・藝術等の諸方面から考察し、雜多を止揚して、最も根本的な精神形態の把握へと向ふ時に、吾等は、前述の如く、おほよそ成長・完成・爛熟・分裂の四大傾向を歸納し得ると共に、更にこれ等を年代的に排列して次の四區分を認め得るのである。

- 一、成長の時代（弘仁・寛平の頃）——桓武天皇延暦元年（一四四二）より宇多天皇寛平九年（一五五七）に至る。
- 二、完成の時代（延喜・天曆の頃）——醍醐天皇昌泰元年（一五五八）より花山天皇寛和二年（一六四六）に至る。
- 三、爛熟の時代（寛弘・長保の頃）——一條天皇永延元年（一六四七）より後三條天皇延久四年（一七三二）に至る。

四、分裂の時代（保元・平治の頃）——白河天皇延久五年（一七三三）より安徳天皇壽永四年（一八四五）に至る。右の時期區分は、勿論比較的な意味のものである。凡そ歴史に於て前後の時期を劃する境界が、數學的に簡單に規定せられ得べきものではないことは當然だからである。

さて、右の四つの時期に於て、各々文化の各方面を指導する主要なる社會的精神が存在し、しかもそれ等が、各々特殊なる個性に於てあるといふことは、考へられ得ることである。又これ等の指導精神は文化の各方面に現はれ、特

に文藝に於て、その全的なる姿態を再現するといふことも、同様疑ふ餘地のない所である。文學的思想形態とは、文學の視野に於ける社會的思想形態に外ならぬ。

平安朝文學作品として現存するものは、歌合・私家集の類を除いて、その數あまりにも寥々たるものである。今名のみ傳へられて、本文の現存せざる散佚物語は、その數百二三十の多きに及んでゐる。

源氏一品經・寶物集・八雲抄・和歌色英集・無名草子・類註密
勘・明月記・拾遺百番歌合・月詣集・風流集・河海抄等に見ゆ。

文學的思想形態の把握を志す本稿は、現存せる少數の作品はもとより、

殘存せざる他の多くの散佚物語の主要精神をも、かくあるべきものとして、觸れ得るだらうことを期する。又それは、理論的に、或程度まで、可能のことでもあると思ふのである。

一 成長の時代——支那文學流行の時代

——空海を中心として——

この時期は、平安朝的文化の創成時代である。支那に於ける文物制度の吸收模倣の時代である。偉大なる宗教家としての空海、偉大なる政治家としての菅公によつて、この時代の文化は象徴せられてゐる。そこには、實踐に向ふ強烈なる意志として、(一)現實への擴充を求むる心があり、(二)現實の整理を求むる心がある。又實踐の背後にある理智として、批判に沈む心があり、實踐を指導する感情として、(一)剛健と雄大とを求むる心があり、(二)幽晦と神祕を求むる心があり、(三)自由と奔放を求むる心があり、(四)沈思と端麗を求むる心がある。しかし、これ等は、印

度及び支那の文化を素材として使驅する行爲の中にあらはれた精神であるが、その精神の方向が常に日本的なるものへと向けられてゐたことは、注目すべきことである。即ち平安朝初期の文化は、外國的文化への盲目的なる追従にあらずして、新しき日本への合流同化の過程に在りしものと解するのが至當である。

一、現實への擴充を求むる心——これは遷都に於ける平安城の規模の雄大にも見えるが、制度に於ても、公儀の改正醍醐官制の改革醍醐弘仁格式醍醐令義解仁明貞觀格式清和の撰進、曆制清和の制定等があり、内治に於ても、國勢調査醍醐群臣の政治批判同等が行はれ、巡察使淳和、檢非違使同等の警察機關が完備し、軍事に於ても、田村麻呂の勇武は、よく各地の内亂を平定した。又經濟に於ても、淳和皇后の農業御巡視に始まり、歷朝産業に大御心を注がせられ、近江三關を設け文德物價の融通を計り仁明土木を起し光孝帝宇多利殖の制を定め醍醐貨幣を鑄造し仁明帝以後歷朝のことあり、左右兩京の物價を公定し淳和たるが如く、積極的の政策が甚だ多い。又風俗に於ても、節儉の令を發し醍醐女服仁明僧服清和の華美を禁じ、歷朝慈善的施設細民の救恤のことに力を注がれた。淳和皇后の如きは實にその代表的なる高貴の女性である。又教育に於ても、學問の内容を改正し、大學寮の財政を豊かにし武成大學の規則を改變し醍醐大學入學を獎勵清和せられ、藤原冬嗣の勸學院をはじめとして、當時の貴族は競うて私學を起し、教育の機會均等を計つた。空海の綜藝種智院が、平民のために設立されたことは、淳和皇后の慈善事業と相俟つて文化の日本化と擴充化とを雄辯に物語る。又外交に於ては、渤海及び新羅との交渉が複雑となつて、歷朝の重大なる關心となり、遣唐使廢止宇多せられて、國民的自覺は益々濃厚になりつつあるを實證した。かくの如く、平安朝初期の政策は、生活の現實を、頗る多様雜多な形態に於て擴充せんとする能動的な精神の生み出したもので、かの頻繁なる唐制採用の中から、鬱勃たる新日本の胎生しつつある

機運を物語るものである。

二、現實の整理を求むる心——雑多に向つて擴充せられた文化は、徐々統一に向つて整理せられ初めた。それは、思想の核心をなす信仰に於て特に著しくあらはれてゐる。佛教は、新に天台・眞言の二宗を迎へ、最澄・空海・圓仁・圓珍等の努力によつて、本地垂跡の精神を益々徹底せしめ、盛んなる堂塔建立・法會供養・放生執行等も、國民生活の根本にふれて、漸次日本的なる年中行事・民間信仰の醗酵へと向つた。かかる神佛混淆は、信仰の日本的統一を意味する。かの歷朝諸社に佛舍利を獻じ、佛師が神像又は僧形の天子の御像を彫刻し、八幡造り又は日吉造の如き特殊なる建築様式を生んだ精神は、後に善相公が延喜六年日本紀竟宴に於て、「佛すら帝かしこみ白妙の波かきわけて來ませるものを」と詠める精神と交流するものである。佛教的信仰は熾烈をきはめたが、なほその思想の根幹には、日本的なるものが嚴然として存在してゐたことを忘れてはならない。即ち、即位灌頂の儀を規定した程の佛教的信仰も、踐祚・即位・大嘗會の如き國家的儀禮の清淨を犯すことは出来なかつた。即位後、伊勢奉幣使の派遣、齋宮及び齋院の卜定、平安城の守護神たる加茂神社の祭儀等の如き、いづれも牢固として犯す能はざる國民的精神によつて終始してゐる。延喜神祇式に於ける觸穢に關する條文は、清淨を尙び、簡素を愛する我が固有精神によつて規定せられたものである。

次に支那の儒教は、漸次佛教と合流し、より大いなる日本的意識への統一へと向つた。例へば海海の綜藝種智院式に於ける教育方針には、儒佛二教によつて、新日本を導き新日本人を誨へんとする雄大な抱負が示されてゐるが、これは長安の制を模してしかも溺ることなかりし平安城の設計に於けると同様なる日本主義的精神の顯現と見なければ

ばならぬ。奈良朝時代の六宗が、支那そのままの移植にすぎなかつたのに對して、儒佛道三教に於ける空海の態度は、明かに日本的同化の實を示したものである。かの戲曲的構想のもとになれる三教指歸の如きは、この心境を明かに物語る。なほ當時列聖は大いに學問を獎勵し給ひ、都堂院・明經道院・算道院・明法道院等の大學校舎は完備し、私學も亦大いに興つて、内典・外典を講じ、入唐八宗をはじめとして、幾多の學僧は、日本人としての自覺と、熱烈なる探求的精神とのもとに、萬死を冒して、異國に求法順禮した。慈覺・智證大師等の驚くべき著述、舶來せし萬卷の藏書等は、この若き日本精神を象徴するものである。

次に陰陽道に於ける陰陽・曆・天文の三道は、從來國家須要の學として重んぜられて來たが、こゝに至つて次第に密教的傾向を帯びて宗教と結合するに至つた。元來陰陽道の本質は、吉凶を未然に備ふるにある。されば國家に於て天變地異怪妖の事あれば、先づ陰陽道之を占ひ、神社に奉幣使を立て佛寺に經文を供養して、災害を攘ふことを祈る。こゝに於て、陰陽道は必然的に神佛二教と結合し、更に朝廷の儀式の上に影響を及ぼすに至つた。かくして陰陽的信仰は、神儒佛道の四教と融合し、つひに國民的信仰として統一されたのである。日本國見在書目録によれば、五行家百五十八部九百十九卷、天文家八十三部四百六十一卷、曆數家五十五部百六十七卷の驚くべき参考書が將來してゐる。これ等の雜多が、國民的な思想感情のもとに統一同化されたことは、平安朝文化史に於て注目すべきことである。

なほ佛教寺院縮流に關する特殊なる感情は、凌雲・文華秀麗・經國の三勅撰詩集に至つて、特に梵門の一門を立て、文藝として承認せらるゝに至つた。わけて漢字の草體或は字劃の省略によつて、國民的の文字たる假名が創案せらるゝに至つて、日本的同化の實績は、益々完成の域に近づいた。又唐・天竺・林邑等より傳來の舞樂は、益々日本的に整

理せられ、神樂は催馬樂を包攝し、東遊・東舞・風俗歌等も宮廷公事に統一せられ、外國より將來せる新樂器は、これ等の古典的詞章を新しい感覺に於て表現し、新日本的なる舞樂の統一は徐々に完成しつゝあつた。しかして、これ等の國民的文化活動の背後には、偉大なる宗教家弘法大師の經世的精神が主流となつて指導してゐたこと、及びやゝ後代に於て偉大なる政治家菅公の日本主義的精神が、和漢兩文學の統一、日本の文教の確立に向つて力強く動きかけたことは、共に注目せらるべきである。

三、現實の批判に沈む心——新奇に向つて現實を擴充し、更に是が整理へと向ふ實踐的意志の背後には、常に過去の文化を反省し批判せんとする靜かなる理智が動く。平安朝初期に於ては、國史編纂として六國史の大部分は完成し、系譜論として新撰姓氏錄・古語拾遺、史傳として都氏の道場法師傳、三善氏の圓珍傳・藤原保則傳等が成つた。史記及び日本書紀の講義は、過去の政道を批判し、意見封事は現在の治政の得失を論議したものである。制度に對する批判は、この時代に成立したる弘仁及び貞觀の格式に見え、又令義解にも示されてゐる。寬平遺戒及び九條師輔遺戒の如きは、體驗の中からにじみ出た内省の記錄である。又式部卿本康親王記西宮記・山崎廣相紀今續紀長谷雄記河津抄、寬平御記等の日記は、私的又は公的生活の批判となり、入唐求法巡禮記・行歷抄等の紀行は、新奇なる未知の世界に對する批判となつた。又學術的知識の總括として新撰字鏡の如き辭書、日本國見在書目錄の如き書志が生れ、類聚國史・治要策苑の如き分類學も試みられた。而して藝術の方面に於ては、詩の本質及び理法を探究する文學論として、かの有名な文鏡秘府論、文筆眼心抄が成つた。又長谷寺緣起の如きは、やゝ後代の淨土宗念佛緣起と共に、歴史より文學へと向ふ橋梁をなすのである。我等は、これ等の中に、現實を批判せんとする冷靜なる理智のひらめきを見ることが

出來ると思ふ。

四、剛健と雄大とを求むる心——淡海三船・大伴家持・和氣清麿等の奈良朝的舊人は、相前後して歿した。今や新興の時代である。この青年日本の新興的精神は、前述の政治・宗教・學問の諸方面に現はれた。しかして、その最も著しい特質を、われ等は藝術の上に見出すのである。即ち嵯峨帝の詩に於ける豪邁宏麗の詞句、空海の詩文に於ける雄大の氣魄、算の詩に於ける凄冷の調、清行の意見封事・革命豫議に於ける推論の明證、入唐求法巡禮記・行歷抄に於ける規模の雄大等は、いづれもかかる時代精神の顯現と云ふべきである。南北一千七百五十三丈、東西一千五百七十丈の土地に擴がる大平安城は、深山幽谷に無數の堂塔を布置した延曆寺・金剛峯寺の大設計と相並んで、壯大なる時代精神を物語る。又雲林院・亭子院・嵯峨院・淳和院等の離宮、深草別業・堀川院・河原院等の別荘工事の雄大、彫刻大日如來像唐經撰の面貌に見える壓するが如き端嚴、如意輪觀音像觀心の額に於ける凄婉、佛畫眞言七祖像東寺の描線にひそむ雄渾、十二天像西大の面相に秘められた勇偉、兩界曼荼羅神護の構想に於ける壯麗等にも、共通せる時代精神の躍動を見る。

五、幽晦と神祕とを求むる心——これは密教的思想の然らしむる所であつて、深山幽谷に於ける堂塔の建立、内外陳の區劃、裝飾等に於ける一種の陰鬱・幽暗の情調が、この時代精神を明白に表現してゐる。彫刻四天王像、十一面觀音像觀心の面貌に於ける凄み、虚空像神護の衣紋に於ける生硬さの中にも、亦この精神があらはれ、高野山明王院藏の佛畫赤不動像智證大師の如きは岩石・面相・火焰、凡てのものが、凄愴・怪奇、眞に人に迫るが如き色彩と形態とに於て表現せられてゐる。かかる密教的精神は、最もよく陰陽道と結合し、文化の各方面に秘密的制度を規定し、朝儀・

年中行事・民間信仰等を著しく幻妖的なものに導いた。この精神は、平安朝初期に於ける幾多の迷信の根源となり、人心をして益々繊細軟弱に陥らしめ、つひに本来の意義を全く没却したるのみか、全く反對の結果を導くに至つた。

六、自由と奔放を求むる心——佛教と儒教とを中心とする平安朝初期の文化は、それがたとひ日本的なる精神のものに融合せられつゝあつたとは云へ、なほそこには一種類型の存在が否定されなかつた。勅撰詩集に艶情門を置き、春閨怨の詩を輯むる時代ではあつたが、しかし、なほ儒佛二教主義を中心とするかた苦しい固定的文化から、自由なる人情に向つて解放を求めめる精神は、當代の戀愛歌人特に在原業平と小野小町とにこれを見るのである。放縱不羈と稱せられた不遇なる天才が、やうやく固定し行く文化に對して、無意識的に發した反抗の叫びは寧ろ當然の聲である。二條后との情事を始めとして、奔放度なきその感情生活は、彼が洛北小野に閑居したる惟喬親王と結んだ篤き友情生活と共に、現實のかた苦しさ矛盾とに堪へられない淋しさから出發したものと見るべきである。世にすね、世を嘲り、規範を破り、道徳を壊して、しかも悠々と藝術の苑に遊んだ彼こそは、奔放なる戀愛と、虚飾彫琢なき純粹抒情詩との中に、美しき女性に終始した佳人小町と共に、まさに好一對の天才詩人である。この自由追求への精神は、やがて曾根好忠に、戀愛希求の精神は、等しく和泉式部に繼承せられるのである。

七、沈思と端麗を求むる心——平安初期に於けるこの主要精神は主として文藝の上にはあらはれる。先づ菅家文章及び後草に集められたる菅公の詞藻を見れば、その流麗なる四六駢體の奏狀・表狀・願文等に時代精神が見える。就中策問の諸篇に於ける字句の彫琢には、最もよくこの精神が發露してゐる。文に對する嚴肅さは、やがて政治に對する嚴肅さでもあり得る。才の人善相公型に對する他の一つの政治家の型として、徳の人菅公の性格がこゝに明かにうき

出てゐる。しかして、かかる精神は、單に菅公個人に限らず、當代の社會の一面に擴がる集團的精神でもあつた。本朝文粹・都氏文集に於ける措辭の典麗、田氏文集に於ける眞摯、紀納言の詩文に於ける恭謙、遍昭の和歌に於ける端正と優美、黒主に於ける優美と雅麗、小町に於ける纖麗と優艶、室生寺金堂壁畫に於ける溫和と流暢も、またこの時代精神を反映するものと見るべきである。

平安朝初期の社會的指導精神を、その主なる傾向によつて分類すれば、おほよそ前述の如くなるではないかと思はれる。勿論かかる精神は、單獨に分離して存在するものではなく、更に高い統一的精神によつて、融然たる統體をなすことは云ふまでもない。それ等の精神は、混合したる全一體として存在し、各性質の一部分は、それぞれ文化の諸相に隨ひ、比較的濃度を異にして現はれるにすぎない。しかして、かかる社會的精神を、具體的に、しかして全體的に、最もよく表現したるものは、云ふまでもなく藝術である。

これ等の精神は、時代の推移に従つて、統體として徐々に變形する。この變形は、ある主要精神が、益々濃厚となつて再現するもあり、又、自ら微弱となつて衰滅するものもある。又、物質が化合して化學的變化を起すが如く、二つ以上の精神が合して、全く別種の精神形態を形成する場合もある。勿論その變形の時機は、水變じて湯となるが如く、徐々にして行はれ、従つてその境界を明確に判然と規定することは頗る困難としなければならぬ。しかして、かかる精神形態の變形は、天災・地變等の外部的原因によることもあるが、主なる原因は政治・經濟・宗教・學問・藝術等文化各方面の内部的社會的原因によつて、自主的に變形して行くのである。かかる文學的思想形態の流動を導く社會的原因が、如何なる形態と性質とを有するかは、新しき文學史に於て、最も興味ある研究題目である。吾等は、

こゝに平安朝第二期の文學思潮について概観しなければならぬ。

二 完成の時代——和歌興隆の時代

——貫之を中心として——

この時期は、平安朝文化が、支那に於ける文物制度の吸収模倣を経て、これを日本的に咀嚼し同化したる時代である。この二つの文化の統一は、延喜に於ける有数の學者であり、かつ古今和歌集及び新撰和歌集の撰者たる紀貫之によつて象徴せられてゐる。そこには、現實の完成に向ふ意志として、(一)安定を求むる心があり、(二)多岐を欲する心がある。又現實への批判に向ふ理智又は情熱として、新しき理想を憧憬する心があり、行爲を指導する感情として、(一)纖細を追ふ心があり、(二)華麗を求むる精神がある。これ等は、支那的文化と日本の文化との同化の中から、更に進んで新しい方向へと活動しはじめた意志に外ならないが、いづれも、前期に於て成長したる精神形態が、それ自身を要求によつて、漸次展開發展してきたものと見るべきである。即ち安定を求むる心は、前期に於ける現實の整理を求むる精神の發展したものであり、多岐を求むる心は、擴充を求むる精神から、理想を憧るる心は、批判に沈む精神と、自由と奔放とを求むる精神との合流の中から導かれたものである。又纖細に向ふ心は、剛健と雄大を求むる精神が、幽晦と神祕を求むる精神と結合し、全く逆轉した女性的精神となつて展開したものである。華麗と技巧とに向ふ心は、沈思と端麗とを求むる精神が、批判に沈む精神と交流して、新に規定したものと考へられる。しかして、か

くの如き思想形態の背後には、春日の如き麗らかなる太平の治世があり、咲く花の如き美はしき後宮の感情生活のあつたことが忘れられてはならない。

一、安定を求むる心——あらゆる現實に安定を求むる心は、完成の頂點に達した文化の必然的に到達すべき保守的な要求の一つである。それは落ちつきと、典型とである。この精神は、政治にも、學問にも、藝術にも顯現した。先づ政權を固定せしめんとする努力は、藤原氏の北家によつてなされた。かつて右大臣良房は、己が女の出にあらざる惟喬親王を排したが、この期に至つて他族の排斥は甚しく、菅原道眞・源高明・橘繁延・兼明親王等は、等しくこの政策の犠牲となつた。次期に至れば、この傾向が更に分裂して、同族間の争ひとなり、骨肉相食むに至るのである。政權の保持は後宮に女子を上りて外戚となるにあり、これよりして、不健全なる襲因が後宮制度を規定して動かすべからざるに至る。重要な官職は北家の門葉によつて占有せられ、太政大臣忠平の如き、實子實頼を左大臣に、師輔を右大臣に進め、父子三人國政を料理するに至つた。次に制度は、高明の西宮抄、公任の北山抄・深窓秘抄等によつてほとんど安定し、財政も、米價調節令^{醍醐}・緊縮令^{村上天}等によつてほぼ安定した。又學問は、四道専門の家が固定して各々世襲となり、朝廷に於ける史記・漢書・文選・日本紀等の講讀は、ほとんど歷朝の行事として固定した。安定を希求する精神は、感情の奔放を抑制して、冷靜なる理智に従ふ。主知的な便利主義は、最も穩健なるものとして、學問及び藝術の各方面に影響を與へた。かくして文藝は著しく實用化され、和歌の題詠・屏風歌・席上の唱和・消息文等、悉く不健全なる社交上の要求によつて濁らされ、かつ曇らされた。常識主義の存在する所には、類型的な穩健はあるが、高き魂の感激も躍動もない。情熱はともすれば安定を破るからである。かかる精神は、美文集として

の本朝文粹・倭漢朗詠集等の撰述態度にも見える。この二者は、漢文學的なる思想感情が、完全に日本的なるものに同化せられたるを示す記念塔である。しかしこれ等も、結局、日本的趣味の類聚として現はれた古今六帖、又は日本的語彙の集成或は分類として現はれた倭名類聚抄・類聚名義抄等と共に、平安朝的美意識を固定化せしめ、概念化せしめ、類型化せしめたにすぎない。此時期には、遣唐使の停止、神社の造營、諸社への佛舍利獻納、天災又は兵亂に際しての諸社又は山陵への祈願・枕讀・漢讀に續いての和讀の制作、和讀より轉じたる今様の案出、萬葉集訓點の試み、風俗歌・朗詠等の遊宴歌謡に於ける支那曲の攝取等、日本の精神を基調とする統一が完成し、その精神を代表するものとして、假名序を有し、かつ萬葉集と文華秀麗集との部類を統一したるが如き新様式のもとに古今和歌集の勅撰が實現するに至つた。この前後から、和歌は大いに興つて、幾多の私家集葉平朝臣集・小町集・友則集・範恒集・藤行朝臣集・千里集・朝臣集・藤原朝臣集・清正集・九條右大臣集・興風集・忠孝集・朝思卿集・仲文集・清原公集・師氏集・信明朝臣集・義孝集・西宮左大臣集・順集・桐宮女御集・本院侍從集・中務集・加茂保繁女集・楡垣延集・惠隣集・好忠集・兼澄集・安注集・傳大納言母集・小大君集等を生み、更に遊戯化に向ふ所に幾多の歌合在履行平家歌合・仁和寺將帥風所歌合・是良親王家歌合・寛平中宮歌合・平を生み、殊に天徳内裏歌合に於ては式目が完成して、これが法則さへも整然として確立するに至つた。實に延喜を中心とする前後は、和歌全盛の時代であつて、その精神は、漢詩の聖作一も傳はらざる醍醐帝の御精神が國民化されたものと見てもよい。しかし、これ等の和歌は、必ずしも純粹なる詩的感情の流露ではない。文化の安定に附隨したる概念的・説明的傾向は、著しく此等の和歌をして類型の中に固定せしめた。ことに後撰和歌集撰進の態度には、先人の規定せる範疇下に生き、典型を過去に求めんとする消極的傾向の甚だ著しきを見るのである。

二、多岐を欲する心——文化の完成は、更に進んで多岐へと分裂する。佛教と陰陽道との結合は、複雑なる祭四角四

御本名祭・三元祭・毛織と祓巳日祓・七福祓・河原祓・神龜と占廣占・天祭・庭火祭・通陽祭等と祓巳・百度祓・千度祓・萬度祓等と文占等と修法とを生み、年中行事は、これ等の宗教儀式の分裂に伴うて益々多岐大原段部齋會・臨時仁王會・法華八講・華陀會・御佛名・興福寺維摩會・藥師寺長壽會・千僧供養・萬僧供養・加持・祈禱等に亙り、神社祭も多端加茂臨時祭・春日祭・石清水祭・同臨時祭となり、新しき刺戟を求むる心は臨時祭の制定をうながした。又宮廷行事も益々多様元日節會・百馬節會・新嘗節會・子の日の遊・餅粥の節・曲水の宴・萬壽の節供・乞巧宴・盂蘭宴・踏弓等となり、多岐を更に華麗にし、刺戟を多からしめんがために、諸社への行幸を奏請するに至り、この傾向は、次期に至つて、益々流行を極めるやうになつた。南都北嶺の學僧たちは、或る時は勅命によつて、各宗義の得失を戦はした事もあつたが、佛教は一般的に哲學的關心を喪失し、漸次法談・說經・呪術・祈禱等に分裂して、年中行事及び民間信仰の多樣なる派生を助けた。又文學上に於ては、準漢文體による諸家の日記・記錄等が益々流行し、草假名の應用範圍は、和歌から詞書へ、消息文へ、日記へ、紀行へ、物語へと分岐して發展した。多岐へ向ふ心は、完成したる文化の當然進むべき道程でなければならぬ。

三、新しき理想への憧憬——貴族を中心として、太平の中に安定した平安城の文化は、その内部に於て自ら矛盾と不合理とを孕まないとは限らない。現實生活には、猶多くの矛盾があつた。その最も大いなるものは戀愛と結婚とに對する不合理である。多夫多妻にして放縱きはまる結婚制度の生む社會的缺陷は、先づ經濟生活の不安であつて、所謂後見うしろみといふ特殊の風習を起す原因となる。後見とは、親兄弟又は他人の中にて、婦人のために一切の費用を辨じ、その一生の生活を保證する者である。源氏に對する女三宮の關係の如きは、この風習の變態的な一形態と見るべきであらう。第二は醜惡なる戀愛鬭争のための人倫の破壊であつて、廷臣の宮女と通するはなほ之を許し得るとしても、他人の妻を偷み、兄弟叔姪の婦に通じ、繼母子・異母兄妹にして相姦するものもあり、朱雀大路、或は僧院の神聖を

けがして、不義を遂ぐるものさへあつたといふ。第三は嫉妬であつて、妻妾は一人の夫を中心として相互に憎悪し、つひに門戸を張つて争ふに至る。かくの如きは、物語・日記等に屢々現はるる事實である。第四は繼子いぢめであつて、閨中の亂脈から生ずる社會悲劇の一である。これ等の矛盾はたうてい堪へられ得るものではない。こゝに、純粹なるものに對する無意識なる思慕の精神の生るるは當然である。この精神は一は現實の擬視にあらはれ、他は後官憧憬の情熱となつてあらはれた。不幸なる戀愛と結婚への無意識的批判は、蜻蛉日記の本質である。この純粹なる戀愛を、現實の中に求めんとする精神は、當時の女流私家集特に伊勢集・拾遺集等に見え、伊勢物語・算物語・大和物語・平仲物語・高光物語等にも見え、次期に於ける和泉式部集に連る。しかして後官憧憬の精神は、次期に於て官廷才女の輩出を導くのである。

理想を求めんとする精神は、現實への追求を離れて、空想への憧憬となることがある。天上と下界とを對立せしめたる竹取物語の神仙的性質、宇津保物語に於ける俊蔭・仲忠の奇蹟的・怪奇的性質等は、この精神の顯現である。しかし、そこには赫夜姫・貴官を中心として、憂世なみの醜惡なる戀愛鬭争があらはれ、五人の求婚者の失敗竹取實忠・仲頼・仲澄等の不幸なる失意に對する無意識的なる批判が示されてゐる。又落窪物語・住吉物語等には、繼子いぢめの事實が示され、ことに前者には、典藥助の不倫の情慾、ところあらはしといふ悲嘆すべき矛盾等が示され、それ等の中に、かかる社會的缺陷に對する批判的態度と、ほのかなる倫理的正義感とがあらはされてゐる。

かく理想を求めんとする精神は、一方現實的なる批判より、現實そのものの中の理想探求へと向ひ、他方空想的なる批判より、空想の中の理想探求へと向ふ。前者は戀愛を主題とする抒情詩・歌物語・日記等をおこし、後者は戀愛

を主材とせる傳奇物語・寫實小説等の物語をおこすのである。しかして、この二者は漸次接近して合流し、現實の空想的批判に統一せられる所に、一大戀愛小説としての源氏物語をおこすのである。この二者は發生及び發達の過程から見ても、明白に別種の性質を有する。即ち前者は、假名によつて表現せられたる詠嘆的な又は社交的な和歌及び消息の文體の發展したものであり、後者は、記紀・萬葉・風土記・日本靈異記等に、主として漢文又は準漢文體によつて表現せられたるが如き口誦的物語が、漸次草假名による表現へと轉向して發達したものと考へられるのである。さてかくの如き理想への憧憬が、主として戀愛及び結婚の規範に對して集中せられたのは何故であるかと云ふに、それは右二者が、平安朝に於ける社會的苦悶として最も主要なるものであり、かつ女性を中心とする文化が、やうやく宮廷に榮えんとする社會の全體を貫く時代的要求であつたがためである。この純粹なる戀愛を希求する精神は、次期の和泉式部に至つて最も濃厚となり、後宮に於ける浪漫的精神勃興の先驅をなし、漸次母性の愛に向ひ、つひに人間愛の境地に到達するのである。

四、纖細を追ふ心——この精神は、次期に至つて最も榮えるのであるが、この期にも已に萌芽が見えるのである。それは、幽晦と神祕とを求めた前期の密教的精神が、宗教的信仰と、儀式とを通じて、現實生活を指導するに至るからである。超自然的勢力への承認は、人間のなる力の否定を意味する。この密教的祕密主義は、多岐に互る年中行事と、民間信仰とを通じて、益々人心を支配し、實生活を指導し、平安朝の社會的感情を複雑にし、纖細にして行くのである。

次に、太平の治世に於て、後宮の女性を中心として成長したる文化が、感受性の鋭敏に向ふのは當然であつて、そ

の精神は、多くの藝術にあらはれたが、特に抒情詩と、音楽とに濃厚に顯現した。當時の歌壇には、二つの相對立する傾向があつて、その一は主知派とも云ふべきもの、その二は主情派とも云ふべきものである。前者は貫之等によつて代表せられる技巧派であつて、語句の豊麗・詞章の彫琢が特徴であり、後者は躬恒等によつて代表せられる情調派であつて、感情の纖麗・詞藻の巧緻が特徴である。前者については別に述べるが、後者は、平安朝に於ける一般抒情詩的精神を纖細に導いたと同時に、象徴の世界、幽玄の世界の待望への豫言を示したかにも見える。躬恒の短歌に於ける嫺々として絶えざる餘情、忠岑に於ける擲すべき流麗、加茂保憲女に於ける寂しき哀傷、元輔に於ける清麗、兼盛に於ける幽玄等は、遠く千載集・新古今集に通ふ一種の氣品ある情調を示してゐるやうに思はれる。次に音楽は、純粹感情の形式的表現であつて、そこにはよく時代精神が顯現した。樂器又は朗吟等が、如何に靈的な魅力を時代人に與へたかは、宇津保物語の仲忠をはじめとして、名人又は名器の奇蹟を語る多くの説話の中に物語られてゐる。この點に於て、音楽は最も靈的であつて、あらゆる藝術中の最高の王座に在るものと云ふべきである。しかして、こゝに多くの迷信的信仰が纖細なる情緒と結合して集中したことは當然と云はなければならぬ。

五、華麗を求むる心——華麗は、完成したる文化の前に開かれた必然的な道である。それは内容の清新よりも、むしろ形式の整美である、思想の洗練よりも、文章の修飾である。詩文に於ける字句の部分的な琢磨整正は、固定せる思想の空虚をおほふ退嬰的な粉飾にすぎない。それは、類型に向ふ心でもあり、技巧に走る心でもある。そして、それ等は、貫之をはじめとする主知派の和歌及び文章に見える主要なる傾向である。貫之の古今集序・蟻通の神に奉る和歌序・大井川行幸和歌序・新撰和歌集序等には、漢文學者としての貫之の修辭學的典麗、語彙の豊麗があるが、思

想の新鮮は求められない。友則集に見える落ちつき、源順集・庚申夜奉和歌小序等に見える整正、忠見集に見える豊麗等は、本朝文粹に於ける詩序・表・奏上文・願文・諷誦文の類に見ゆる性質と共通するものであつて、就中小野篁の令義解序、紀淑望の古今和歌集序、菅原文時の意見封事、兼明親王の菟裘賦等に存する特徴と一致するものである。平安朝的美的意識の類聚とも云ふべき倭漢朗詠集と、古今六帖とに見える修辭的華麗は、最もよく時代精神を代表するものである。

しかし、華麗を求むる精神も、この期にあつてはなほ素朴さと、單純さとを失はない。そこにはまだ次期のやうな頹廢はない。なほ掬すべき風格と氣品とを存するのである。例へば、土佐日記に於ける行文の簡潔、定家の模寫せし貫之筆の土佐日記殘簡前田家藏・秋萩帖藤原通川家藏・道風消息中の假名讀華帖・傳佐理筆の賀歌切關戸氏藏等に見ゆる草假名に於ける筆意の古朴、醍醐寺五重塔・大原極樂院本堂の結構に示されたる落ちつき、醍醐寺藥師堂本尊の面貌に残る威嚴、同じく五重塔内部の繪畫に示されたる色彩の豊麗、東寺觀知院炎魔天像の描線に見ゆる端正等は、優美と華麗を備へながらも、なほ一種の雄健の氣魄を失はないのである。しかるに次期に至れば、華麗を求むる心は、纖細を求むる心と結合して、つひに華美となり、奢侈となつて、生活の各方面を力なき頹廢の色をもつて粉飾し始めるのである。

以上は、平安朝第二期の主要なる文學的精神について述べたのである。これ等の精神は、大空に浮ぶ雲の如く、しばらくも靜止することなく流動し變轉して、つひにその總計の流れは第三期思想形態へと推移するのである。

三 爛熟の時代——物語文學全盛の時代

——御堂關白を中心として——

この時期は、平安朝的文化が完成の頂點に達した時代である。人心は文化の陶醉より漸次ほのかなる頹廢へと向ひつゝあつた時代である。この時代の社會的精神は、この世をばわが世とぞ思ふと誇つた御堂關白道長の榮華によつて代表せられる。そこには、晩春の如き絢爛があり、現實的美への恍惚がある。淨土的信仰によつて彩られた曼陀羅の明るさや、後宮女性によつて描き出された物語めく優艶がある。けれども、それ等の中には、なほいづこともなくほの暗き一抹の哀愁が漂ひ、やがて崩壞の道へと向ふであらう悲しむべき運命の影が宿されてゐる。望月の如き殿の榮華は、つひにその世、繼たちによつて維持されず、道長薨後三十年、法成寺炎上は、その華やかなりし文化の崩壞を象徴するものであつた。眩耀にみてる大伽藍の中で聞く梵鐘の餘韻ほど、文學史家の心をいたましめるものはない。

春日遅々たるが如き、爛熟期に於ては、前期にひきつづいて、新しい社會精神が各方面に生れた。即ち政權の安定を計らんがために、(一)陰謀に向ふ心があり、文化への陶醉に導かれて、(二)享樂に向ふ心があり、生活の多岐と類型とを追求する傾向から、(三)博識と機智とを求むる心となり、理想を求むる心から、(四)新しき情熱への希求となり、華麗を求むる精神から、(五)華美に流るる心となり、繊細に向ふ感情から、(六)繊弱と幻妖に走る心となつた。勿論これ等の精神は、他との交流複合の姿態に於てあらはれ、決して、自身單獨にあらはれてゐないことは、他のい

づれの時代とも共通した事實である。今はただこれ等の主要なる精神を、可能なる範圍に於て、最も單純なる姿態にまで還元し、複合體の文化に對して、一つの病理學的整理を試みようとするのである。

一、陰謀に向ふ心——この精神は主として政權の奪取に於てあらはれた。權力私有への野心は、前期に於ては主として他族排斥であつたが、この期に於ては、同族間の醜惡なる鬭争となつた。關白兼通は弟兼家と争ひ、道隆・道兼・道長等も亦骨肉相争つて、平安朝思想史上に汚點を印した。政權の争奪は、後宮に勢力を確立し、幼帝を立つることによつて決定した。そこには男性的な實力による鬭争はなく、女性的にして隱險なる嫉妬と中傷とがあるのみである。實力の喪失は、卑劣なる陰謀となつて宮廷の神聖をけがした。伊周・隆家等はもとより大江以言・同匡衡等も、かゝる政策の犠牲となつた。兼明親王の如きは、兼通・兼家の醜惡なる政争のために、ほとんど傀儡の如く翻弄せられ、花山天皇・三條天皇・敦明親王に對しても、藤原氏の隱險なる政策は、また甚しく御意に添はざるものが多かつた。ことに、月明の夜、道兼にあざむかれ、あわただしく萩の戸を出でて、花山寺に落飾し給へる薄幸なる天子の御運の如きは、現實の史實として語るにはあまりにも哀しい。

陰謀と嫉妬とによつて動かさるる政權の對立は、次期に至れば次第に明確なる對立となり、つひに武力に結合する。武力が一切を清算する時代は、わづか八十年の後に迫つてゐるにかかはらず、藤原氏はなほ陶然として、倦怠に向へる舊文化に心酔し、小天地の中に纖弱なる反目を事とせるを見るのは、文學史に於ける一つの憂鬱でもある。

二、享樂に向ふ心 生活の充實を求むる精神が多岐に分れて發展する時に、最後に到達するものは、感覺的な美的享樂を求追する心である。この期に於て光・色・音・形・にほひ等の感覺美が著しく發達した事は、源氏物語・枕草

子をはじめとして、多くの文學作品にあらはれてゐる豊富なる語彙、特に形容詞と副詞の發達に於て知ることが出来る。これ等の語彙の内面的性質については、昭和五年十月特報「國語と國文學」中の拙稿を「讀まれんことを乞ふ」 又白粉・頬紅・黛・鐵漿による化粧、十二單衣・五つ重・七つ重の服裝、

四季の色彩の限りをつくしたるが如き多様な襲色・織色・染色の色目例へば春は紅梅・柳・櫻、夏は卯の花・薔薇、秋は萩・女郎花・白菊・青菊、紅葉、冬は朽葉色、松等 出衣・出

桂等の色彩對比、香壺・火取・硯笥・草子笥・唐匣・泔杯・茵・衣架・厨子・几帳等の室内調度、寢殿造の内部に於

ける彫刻・蒔繪・螺鈿の裝飾、糸毛・檳榔毛・網代等の牛車及び輿、儀仗の裝飾品となれる刀劍の鞘・弓・胡籬等の

形狀・色彩等に見える繊細な官能的傾向は、かかる精神の發現と見るべきである。殊に衣服の色彩に華美の風を増し

來れることは、清行の封事にも見え、醍醐・一條兩朝の驕奢の禁令によつても想像せられる。又加茂の祭の奉幣使が、

一條大路を渡る鹵簿の壯麗と眩耀は、なほ未だ刺戟不十分とてか、進んで帝王の行幸を奏請すること、この期に至つ

て益々盛となり、一條帝は、春日・松尾・大原野・北野へ、後三條帝は、日吉・稻荷・住吉・祇園へ、それぞれ盛な

る行幸があつた。有閑階級の倦怠を防がんがためには、大饗・臨時客をはじめとする社交的饗宴、詩文・和歌の會、

探題・探韻・探勅・韻ふたぎ・篇つき・詩合・歌合・花合・前裁合・根合・扇合・謎合・繪合・香合・貝合・艶書合・

あて繪・扇ひき等の勝負等、種々纖弱なる人爲的方法が、多岐に互つて案出せられた。又これ等の遊びには興を添へ

んがために物を賭け、負けわざをして勝方を饗することもあつた。又龍頭鶴首の舟遊、笛・琴・琵琶・和琴・箏・笙

等の合奏、今様・朗詠・讀經あらそひ・さるがう・田樂の聲樂及び舞樂等は、いづれも貴族階級に於ける享樂的文化

の所産である。これ等の歌舞・遊戯は、女性的のものが多く、蹴鞠・小弓・賭弓・駒くらべ・鷹狩等の如き男性的な

遊戯は重きをなさなかつた。猫はその嬌聲媚態のゆゑに、宮廷に於て最も愛せられ、つひに朝廷これがために産養ひ

を行ひ、乳母を定むるなど、痴態を演ずるに至つた。又當時民間に流行せし民謡・但歌には、頽廢的な性慾的感情又は官能を表現せしものが甚だ多い。すべてこれ等は當時の家録・日記・隨筆・物語等をはじめ、新樂記・雲州消息・傀儡子記・梁塵秘抄その他に發見する所で、いづれも當時の文化の爛熟と、享樂的傾向を雄辯に示すものである。

享樂に向ふ心は、形式美を整ふべく、壯大なる建築を起し、兼家の東三條殿は清涼殿に模し、道長の三條の第は國司に課して造營せしめた。なほ新に巨刹を建立し、または主人の歿後その住居を改めて寺院となすものも多く、極樂寺・法性寺・法興院・淨妙寺・無量壽院等甚だ多い。ことに法成寺の大伽藍は、關白道長が、王事には怠るとも此度は力を盡せと諸國に諭し、その工事に従へる家司は擧げて國司又は檢非違使となしたるが如き公私を混じたる驕慢の中に完成した。又貴族等は、好んで石山・長谷に參籠し、道長は行を盛にして、南都七大寺及び高野山を巡禮し、また度々盛なる經・堂塔供養を行つた。これ等には、いづれも現實の享樂を追求してやまぬ貴族的な精神の内を在せるを見るのである。

三、博識と機智を求むる心——多岐を求むる精神が、繊細なる感覺美へと向ふ時、そこに頽廢せる享樂的態度の生ずるは前述の通りである。しかるにこれが一度び知的なる方面へと向ふと、そこに博識と機智とを尙ぶ心の生ずるのは當然である。しかるに博識は辭書知識の平面的な羅列である。雑多なる知識は、何等の思索的苦惱を経ずして、徒らに枯死せる知識として疊積せられるのみである。そこには廣さはあるが深さはない。惘々として人にせまる暗示と生命はない。機智は一時の思ひつきであり、理智の淺薄なる遊戲にすぎない。如何に當意即妙の言辭と雖も、結局は不快なる洒落にすぎず、人間精神の深奥からにじみ出る莊重の聲として聞くことは出来ない。それは、言辭の上に泡

沫の如く消えて行く輕薄の姿である。博識と機智の榮ゆる所に、固定せる便利主義を見る。そして、そこに、輕薄なる才人と、社交人との群集を見るのみである。

日本國見在書目錄によれば、當時我が國に將來せし支那の書は甚だ多い。就中、美文麗句集として隋唐に流行したる「文選」は、平易にして女性的なる詩文集「白氏文集」と共に、平安朝貴族の間に愛誦せられた。その他、史記・漢書等は外國の史書として、日本紀は國史として、等しく宮廷に流行した。しかし、これ等の書は、單に博識と、機智との材料として用ゐられたにすぎない。深き思索もなく、高き批判も見えない。ただ、それ等の中から斷片的な知識を抽出して記憶し、社交上の實用的な用具に供したにすぎない。

當時才人は、女流に於て清少納言がある。その枕草子は、一面雜多なる平安朝的美意識を類聚して、古今六帖にならひ、一面博識と機智を示して、自己の性格の深からざるを告白したものである。彼は學才の人ではあるが決して藝術の人ではない。そこには學究的な明澄はあるが、文藝的な深遠はない。明るさはあるが、ほのかさが無い。枕草子中に見ゆる彼の機智頓才の大部分は、當時の人々の推稱やまさりしほどの價值を有するものではない。それは過分に評價せられたる價值である。むしろ、彼の本領とする所は、その明澄なる美論になければならない。

當時第一の賢者の譽高かりし齊信・公任・俊賢・行成の所謂四納言の事蹟は、枕草子・大鏡・悅目抄・袋草紙・十訓抄・愚秘抄・西公談抄等に散見するが、それ等が如何に淺薄なる才人であつたかは想像に難くない。ことに公任は、大堰川に於ける所謂三舟の才人として、一代の賢名を擅にしたが、その新撰髓腦に於ける見識は未だ高しと云ふべからず、わけて金玉集に於ける詠歌の風格は全く舊態の摸擬にして、因循の外は何等の新味をも見出し難きものである。

彼は結局驕慢なる才人にすぎない。

博識と機智を求むる時代精神は、朝野群載に於ける多様の類聚、語彙の類型化にもあらはれ、續本朝文粹に於ける虚文浮辭の輕薄化の中にもあらはれてゐる。又神仙傳・續本朝往生傳・江談抄等に於けるが如く、事實談から物語への轉向の過程にも、博識を希求する精神は明瞭に現はれてゐる。これ等は潑刺たる進路を喪つた固定的文化が、自ら崩壊への過程を辿りつつある姿である。その聲徒らに大にして、持する所甚だ微弱なるを示す虚榮の影である。

四、新しき情熱を求むる心——前期において見られた理想を希求する精神は、この期に至つて、新しき情熱を求むる心へと轉向した。この精神は後撰集及び家集に於ける曾禰好忠の新鮮なる感情に共通するものがあつた。あらゆる因襲の殻を破つて、純粹なる感情に生きんとする憧憬である。

この抒情詩的感情は、先づ華やかなる情熱への希求として、和泉式部の和歌及び生活にあらはれた。華やかなる感情とは、純粹なる戀愛を求むる感情である。不合理なる現實生活の中に、純粹なる戀愛を求めんとする積極的精神は、紫式部日記・和泉式部集及び續集の豊富なる和歌と流麗なる筆致の中に明瞭に指摘することが出来るのである。彼の歌は實感の歌である。いつはりなき生活の直接的記録である。それは題詠や屏風の歌ではない。和歌は彼の生活であり、彼の生活はまた和歌でもある。奔放なる情熱は、そのまま彼の生活となり、そして和歌となつた。

和泉式部は、理想の淨土を、求むべからざる穢土の中に求めてさまよつた美しき巡禮である。可憐なるこの戀愛詩人は、甲より乙へ、乙より丙へと、轉々として放浪したにかゝはらず、すべての男性に失望せざるを得なかつた。それはかつて業平が失望し、小町が失望したと同じ理由であつた。彼女が自ら貞操を持するの輕きは、理想を追ふ情感

の強きを物語るものである。外面的な道念は、彼女の性行を淫靡と誘ふかも知れない。けれども、人間永遠の悩みを率直に悩み、勇敢に告白した彼女こそは、あらゆる時代、すべての人々によつて、眞に愛せられ、親しまるべき存在でなければならぬ。

業平・小町・和泉式部に連る戀愛希求の精神は、わが平安朝時代に於ける浪漫的精神の先驅をなすのである。といふよりも、浪漫的精神は戀愛を求むる精神の發達せしものと見るべきである。この意味に於て、和泉式部はわが國文學史上に於て、最も重要な地位に立つ存在であると云はねばならない。

戀愛を求むる火の如き精神は、次第に靜かなる情熱へと推移した。これは和泉式部自身に於ても體驗せられた。それは母らしき心——母性の愛への轉向である。和泉式部が、わが子小式部を愛して止まなかつた純粹なる感情は、正續式部集中にあふれてゐる。この母らしき愛は、赤染衛門にも赤染衛門成尋阿闍梨母にも成尋阿闍梨母紫式部にも紫式部菅原孝標女にも菅原孝標女體驗せられた清く美しい人間の感情である。母性の愛は、戀愛から人間愛へと向ふ精神の當然達着すべきもの、源氏物語の中にも、明石上と姫君、六條御息所と姫君、髭黒北の方とその子息達、女三の宮とその若君等の間に結ばれた純情は人を動かすものがある。なほこの心は狭衣・濱松中納言・ねざめ等にもあらはれた。

戀愛から、母性愛へとうつる感情の前には、自己の姿をしみじみとみつめる加茂保憲女のやうな、さびしいうた人も出たが、それ等も、また新しい文學史から忘れられてはならない。人間愛の大いなる精神は、紫式部によつて、その日記及び源氏物語の中に明確にあらはされた。

純粹なる戀愛を外に求める心は、次第に内に深まり、自己の體驗と反省の中に潜り入つて、遂に母性愛に到着した。

その母性愛を更に掘り下げ、一層奥にある普遍的な存在へと向ふ時に、人間愛に達するは、きはめて自然な道すぢである。しかし、そこには、經驗の彼方に沈潜し、現實のかけに思索する魂が準備せられるを要する。物象の表皮を走る輕薄な心、社交の機智に濁された卑俗な心は、たうていこの形而上の世界に向ふことは出来ない。紫式部の最後に見出したものは、戀愛でもなく、母性愛でもなく、實にそれ等の一層奥にひそむ人間的なる心であり、その心への寂しき、しかして、熱烈なる愛である。

紫式部の眼は、外面的な粉飾や眩惑をこえて、常にその内面なる「心ばへ」へと向つてゐた。「心ばへ」こそは、一つ一つの個性の奥に宿る純粹なる人間精神を宿す姿である。紫式部は、襲の色、衣紋の形の彼方に、高き「心ばへ」を眺めた。式部は、かくあるべき筈の幻想を自己の内面にゑがいて、所謂「もののはれ」の世界をその中に見出した。「もののはれ」は、先驗的な性質である所の心の奥の何物かが、いみじき調和と統一とに於て、客觀的な形態をもつて現はれたものである。これは感性と理性との完全なる調和と云ふことも出来よう。かくて、「もののはれ」の主體は「心ばへ」であり、人間性の自律的性質である。彼は、この考を日記の中に語り、この考をもつて源氏五十四帖をあらはした。

源氏物語は、上述の意味に於て、かくある世界の描寫ではない。かくあるべき筈の世界の表現である。作者は日本紀を熟讀せるなるべしと評せられたる如く、そこに描かれた世界は、單に空想の世界ではない。生けるが如き運命の一大社會小説である。榮華物語は御堂關白時代の寫實であるが、源氏物語は、紫式部の高き幻想からゑがき出された空想的なる——しかも空想にあらざる——より必然的なる——御堂關白時代の表現である。多くの人々が、この物語

に於て生れ、生き、そして死んだ。戀を得、戀をゆづり、希望を喪ひ、又希望を得、悲しみ、怒り、笑つて流轉する大なる社會のうねり、生と死とを貫く偉大なる人の子の運命が、この物語五十四帖の中に、驚くべき魅力をもつて表現せられてゐる。夕顔・末摘花・源典侍・朧月夜内侍・六條御息所・明石上・玉鬘・夕霧・雲井雁・女三宮・柏木・落葉宮・浮舟・匂宮……これ等の人々は、かつてこの世の驛路に於て、吾等の相見た人々ではないかと思ふ。吾等は、この小説の中に、多種多様な人と人生とを見た。しかも、それ等は、あるべき筈の、又あらねばならぬ人と人生とであつた。

源氏物語には古典主義的な端麗がある。玉の如き感情の洗練がある。それは奔放や激越ではない。後代の物語は、多くこの物語の感化を受けながら、全く形骸の模倣に走つて、眞の精神を喪失した。狭衣・榮華・濱松・ねざめ等、みな然らざるはない。しかし、これ等については、改めて項をかへて考へて見たいと思ふ。

五、華美に流るる心——享樂に向ふ精神は、衣食住に互つて、感覺的な美への陶醉・恍惚となり、すこぶる生活を華美に導いた。この華美に向ふ時代精神の根本には、淨土教の流行が著しく影響してゐたことは考へられ易い。道長の建立した法成寺の金堂供養が如何に盛大であつたかは、金堂供養記によつて知る事が出来るが、その時は、後一條天皇を始めとし、皇太后・中宮・東宮の行幸啓があつて、絢爛目を奪ふばかりであつた。その内部の結構に至つては、更に善美眩耀の限りを盡し、内部の用材は紫檀の名木、これには寶玉を鏤め、時繪・螺鈿を施し、壁面には金胎曇茶羅・釋迦八相の圖をえがき、中央の佛壇には當代の名匠定朝の作にかかる大日如來像を安置し、その左右には、釋迦・藥師・文殊・彌勒の像を布置して、それ等の蓮座の裝飾は輝くばかり華麗を極めた。なほ金堂をめぐる東西南北には、

五大堂・阿彌陀堂・釋迦堂・文殊堂・千手堂・戒壇堂・法華堂・大塔等の堂塔・鐘樓・經藏・僧房・浴室、いづれも完備整頓し、御堂關白の榮華のすべては、こゝに集中するかと思はれた。

かくの如き榮華を支へた豊富なる財力は、多く國費をもつて之にあて、或は御莊・御牧等の莊園の物資をあつめ、私民奴婢を使役して利を占めたものである。藤原氏の莊園は、年と共に増加し、朝廷に倣ひて政所といふものを設け、家の別當・家令など稱する家司は、莊園に對して連署したる御教書を下し、朝廷の官人を使役して家務を執らしむるに至つた。藤原氏の財政はかくして豊富を極め、唐物使を筑紫の博多に遣はし、支那の商船より香藥・帛・布・名器・禽獸等の珍奇なるを買ひ求め、綺羅を飾り風流の限りを盡した。實に難波・太宰府に設けられたる鴻臚館は、かかる異國なる獵奇と奢侈との迷宮であるかに思はれた。

華美を求むる精神は、享樂に走る精神と相並んで、御堂關白時代の最も主要なる社會精神である。この精神は、淨土教的信仰に彩られたる文學・建築・彫刻・繪畫・工藝・草假名等にも顯現した。翫々として絶ゆるが如く絶えざるが如き繊細流麗の文體は、源氏物語を中心とする物語・女流日記等に共通する文體である。そこに描かれたる情緒は、まことに閑け行く春の惱ましさでもある。暮れ行く夕空の寂しさでもある。眞に華麗と哀愁とは、當時の文學の重要な特質であつた。すべては平面的・繪畫的なる靜止美にして、立體的・彫刻的なる強き力にみちたる美は見られなかつた。物語は、それ故に流麗なる文字によつて書き綴られたる繪卷物とも云へよう。拾遺集を中心とするものも朝麗藻等に於ける詩形及び詩想の優麗、具平親王・大江匡房・慶滋保胤等の詩文に於ける豊艶等、いづれもこの時代

精神の一面を示現する。のみならず、御堂關白時代そのものが、已に一箇の美しき繪卷でもあり、かつ曼荼羅でもあった。

豊麗な繪畫的精神は、宇治平等院の建築の中にも見られる。平等院はもと河原左大臣融の別業であつたが、後道長の領する所となり、永承七年その子頼通之を寺となし、平等院と號して法華三昧を修せしめた。當時の建築は、阿彌陀堂・經堂・金堂・三重塔・講堂・鐘樓・東法華堂・西法華堂・五大堂その他の堂塔から成つたが、今は當代の遺物としてわづかに阿彌陀堂即ち鳳凰堂が現存するのみである。その佛殿の構造は鳳凰を象り、左右の高樓回廊を兩翼とし、背面の廊を尾とし、宇治川の清流を隔てて朝日山に對し、宛然一箇の優艶なる繪畫としての表現を有する。殊に大棟の兩端の雌雄の鳳凰は風に隨つて舞ひ、結構は調和正しく、整然たる繪畫の特徴を現はす。又丹塗の外柱及び壁、透彫唐草模様金の具を附した垂木・尾垂木、寶相花及び菩薩像を彩色にて描きたる内柱、淨土曼荼羅・九品淨土を描きたる内壁、菩薩天人山水を描きたる扉、いづれも絢爛華麗の限りをつくしたものである。

その他、當代建築として殘存する法隆寺大講堂・淨瑠璃寺・宇治上神社等に於ける自然との美しき調和、典雅なる曲線、幽玄なる明るさ等は、いづれも、當代の時代精神を現はすものと見るべきであらう。又當代に於て最も完成した寢殿造りは、屋根の勾配のゆるやかさ、檜皮葺の輕快さ、すこぶる明朗瀟洒の表現を有する。

名工佛師定朝は、禁裏の御持佛、再建興福寺の金堂その他に佛像、鳳凰堂本尊を刻んだが、その門に出でたる覺助、長勢等は、いづれも一世の名匠と稱せられた。鳳凰堂の本尊は定朝作と傳へられ、淨瑠璃寺本尊と共に丈六の座像であるが、優美豊艶の面貌を有し、かつ流暢親しむべき衣文を有する。峯定寺及び淨瑠璃寺の吉祥天像は、艶妖雅麗に

して、その曲線はきはめて柔かである。法隆寺金堂の毘沙門天像・吉祥天像は、優麗の中にも繊細がある。當代の彫刻には、阿彌陀像が多く、その表現は圓滿優美、多く華麗な彩色、燦爛たる金箔が施され、光背蓮座も繊細華麗なる彫刻・色彩によつて裝飾せられる。これ等は、いづれも淨土宗的傾向によつて彩られたる御堂關白時代の文學的精神の一面を示すものである。

繪畫的なる道長時代の文化の特質は、最もよく繪畫そのものの中に表現せられた。彌陀尊像・諸佛來迎圖の多いのは、勿論淨土教の影響である。巨勢金岡の子公忠以下繪所長者に任ぜられてから、所謂巨勢派の觀念論的畫風が大いに興るに至り、同じく繪所長者となつた托摩爲成も、亦鳳凰堂の扉の繪をかいたと傳へられる。現存せる繪畫の中、最も注目すべきは、高野山の彌陀二十五菩薩來迎の圖である。惠心僧都の作と稱せられ、規模雄大、姿態優艶、面相柔和、しかも内に犯し難き森嚴の氣を藏し、當代の精神を最もよくあらはす。又鳳凰堂の扉の内、左右の壁面なる九品彌陀來迎圖、本尊の背後なる淨土曼荼羅、いづれも爲成の筆と稱せられ、絢爛・華麗の大作である。

御堂關白時代の精神は、工藝美術にも現はれてゐる。鳳凰堂の扉の金具・棟の銅鳳・天蓋の螺鈿・金剛峯寺なる經唐櫃の蒔繪・螺鈿・金具等、いづれも優美、華麗をきはめたものである。又道長自筆にかかる日記中の草假名、傳公任十五番歌合の書風に見える優麗と變化とは、秋萩帖の如きものから、更に進んだ手法の圓熟を示すものである。

六、幻妖に向ふ心——現實生活の矛盾と不合理とからの解放を希求する精神は、(一)新しき情熱への憧憬となり、こゝに戀愛から母性愛へ、母性愛から更に人間愛へと深まり行く一系列をなした。多くの抒情詩集・日記・物語等がこの列の中に生み出された。同様の精神は、次に(二)新しき生活への思慕となり、この世ながらの淨土たる理想の世

界が追求せられ、つひにその樂園は後宮生活に於て見出された。後宮は、女性を中心とする藤原氏の政策の生み出した美しきしかして力強き存在である。藤原氏の主要なる政策は、この後宮の確立及び充實にあつたといつてもよい。従つて後宮には、名門に出で、容色に恵まれ、才學に秀でたる女性が、そのうるはしき主として迎へられた。「一には御手を習ひ給へ。次にはきんの御琴を、人よりことに弾きまさらむとおぼせ、さては古今の歌二十卷を、みなうかべさせ給ふを、御學問にはせさせ給へ」といふが如き、特殊の教養を受けたのは、宣耀殿の女御だけではない。博識と機智とは、後宮に於ける第一義的な條件である。もし後宮對立して、互に天子の寵を争ふが如き場合には、各々すぐれたる才女を自己の門に招致して對抗すべきは當然のことである。こゝに於て後宮出仕の道は開ける。

清少納言が「千歳もあらまほしき御ありさまなるや」と云ひ、又「九品蓮臺の間には下品といふとも」と嘆じたる皇后定子の御様、「かがやく藤壺」とよばれ、「うき世のなぐさめには、かかるお前をこそ尋ねまゐるべかりけれ」と紫式部によつて述べられた中宮彰子の御様は、「美」そのものであり、「善」そのものである。後宮こそ、この世に残された唯一つの淨土である。そこは可能的世界中、最も美しくそして純粹なる理想の世界である。されば、幾多の詩的憧憬は、期せずしてこの後宮に向つて集中せられた。例へば、戀愛に失望したる和泉式部、結婚生活に破れたる紫式部等は、その現實的な堪へがたき悩みを、この世ながらの淨土たる後宮に於て慰めんとしたものと考へられる。しかし、事實は決してさうでなく、後宮も結局は遠くから見られた美の世界であつた。この世ながらの醜惡なる現實、機械の如き不活潑なる年中行事、隱險なる政争、不純なる戀愛は、やはり後宮に於ても同様に存在した。

かくて現實生活のあらゆる方面に失望した寂しき個性の進むべき道は、ただひとり空想の世界のみである。ただ空

想の世界のみが、迷へる魂を救ひ、安らげき夢を興へるであらう。こゝに於て、理想を空想の中に見出さんとする精神が、再び新しい、しかして根強い力をもつて後宮女性に誕生した。この浪漫的精神は多くの物語・繪卷・繪日記等への耽溺、創作への積極的な關心の原因となつた。多くの散佚物語は、恐らくこの時代に出でて、愛讀せられたものであらう。「繪にかきたる」「物語に見えたる」等の言葉は、紫式部によつて、屢々用ゐられたが、これ等の物語的・繪畫的な概念は、この世ならぬ、空想的なるの意味である。と同時に、理想的なる・純粹なる・美的なるの意味でもある。かくして、御堂關白時代の「美」は、著しく寫實から離れて、幻想に向つた。「もの姫君」といふのは、理想化せられたる、美の世界に於ける姫君の意である。而して、「もの」は、もののはれ・ものけ・もの悲し等無數の言葉を生み出す基本概念であつて、超經驗的實在を示す。もののはれは、かかる超經驗的精神が、客觀的な形態の上に顯現したる主觀的性質をさすのであつて、形容詞「心ばへ」とほぼ同じものであるが、ただ「心ばへ」は、人間に關する場合に特に限られるにすぎない。紫式部は、日記に於て「心ばへ」を見つめ、源氏物語に於て、「もののはれ」をさがいた。従つて彼女の文學觀は、著しく先驗主義的であり、觀念論的でもある。

紫式部に於ては、「もの」の主體及び性質が如何なるものであるかは、明瞭に規定されなかつた。ただそれが人間精神の深奥にひそむある神祕なる性質であることだけは、漠然と考へられてゐたやうである。けれども、彼女は哲學者ではない。従つて理性の自律性を思索する深さはもたなかつた。源氏物語に於ては、「もの」が一種のほのかさ・かすけさに於てあらはれてゐる。そこには象徵主義の初期に見るやうな漠然たる情調と氣分とが、蒼き夕靄の如くあるかなきかに遙曳してゐるのみである。平安朝的な幽玄の精神を、我等はこゝに見るのである。

源氏物語に於ける「もの」の觀念は、科學的な判斷と、哲學的な思索とを缺く人々によつては、正しく批判される
ことが出来なかつた。加ふるに、密教的呪術は、陰陽的信仰と結合して、幾多の繊細性備なる迷信を生み出し、つ
ひにそれ等の民間信仰に導かれ「もの」の解釋は漸次人間的存在から離れて、超自然的勢力へと移動した。即ち「も
の」は、人間精神の内面に存在する神秘的性質ではなくて、自然の彼方にあつて、人間の運命を支配する意志——神
佛・妖怪・死靈・生靈等と同様に解せられ、つひに所謂「ものけ」と同意義とせらるるまでに至つた。こゝに、奇
怪不可思議なる迷信をして益々多岐ならしめ、更に進んで幻妖の文學を新しく生み出す理由が開けるのである。

源氏物語に於ても、神秘的なる怪異が物語られないこともなかつた。例へば夕顔・葵の上の死、六條御息所の衣に
染みかへる護摩の香、暴風雨の夜朱雀院の見られた故帝の夢、朝顔卷で源氏の見た薄雲女院の夢、浮舟の宇治川に投
身する前に見た幻の美男等が即ちこれである。しかし源氏に在つては、それ等は漠然たる一種の情調、又は物語の全
體を彩る一種の氣分として、きはめて必然的な發展をもつて描かれた。われ等は、源氏物語に於ける怪異の中に、目
立つほどの不合理や矛盾を感じざるのみならず、かへつて、それ等が、きはめて自然に、しかも効果的に表現されて
ゐることを認めるのである。即ち、源氏物語の怪異は、情調や幻想から導かれた必然性を有するのである。

しかるに、源氏以後の物語になると、氣分的な情調よりも、筋の變化多様を目的とした卑俗な要求から、種々なる
怪異が物語られることがある。それは狹衣物語に於て代表せられてゐる。例へば、紫雲に乗つて虚空から下りてきた
天稚御子の幻影、大將が齋院を訪れて琴を弾く時、鳴動三度び、異香を薫せしめた神殿、その他、天照大神・加茂大
神のみ告、普賢菩薩、飛鳥井の君の幽霊の出現等は、何等の情調を伴はない筋の上の怪奇にすぎない。わざとらしい

ものはあつても、源氏物語に於けるが如き深刻な魅力は全くない。狹衣に於ける筋の複雑又は多様性は、固定せる文
化意識の一面を反映する。それは感情の必然的な旋律の中から展開するゆたかなる筋の多様性ではない。便利主義的
な淺薄・狡獪・あてこみが、感情の枯渴を粉飾せしむべく、一時的・機械的に場面の變化を試みたものである。狹衣
の作者は、源氏を模倣すべくあまりにも凡庸卑俗なる自己を知らなかつた作家である。ことに露骨なる官能描寫は、
かつて源氏に見られなかつた所、下品なる頹廢の時代精神の一面を雄辯に物語るものである。

幻妖に向ふ心は、比較的藝術的な正しい發展をとげて、濱松中納言物語・夜半のねざめ・更級日記等の精神に達し
た。これ等の作品には、夢・幻・怪奇も、少からず取扱はれてゐるが、それ等は、少くとも生活的感情にふれたもの
である。竹取のやうな童話的構想とは異り、従つて、源氏物語ほど切實でなくとも、浪漫的な一種の情調と魅力とを、
決して失つてはゐない。例へば、濱松中納言物語に於て、吉野の尼君臨終の際に立ちこめたる紫の雲、中納言の夢に
見えた唐の後の幻等は、亡き父が生をかへて唐の帝の皇子となれるといふ奇怪なる構想と共に、寫實小説から一步を
ふみ出したものであるが、そこには單に狡獪なる創作上の企圖となすべく、あまりにもしめやかなる愛と、そして豊
かな感情がある。むしろ作者は、かかる不可思議なる因縁に對しても、溫き必然性を感じて筆を執つたではないかと
思はれる。即ち濱松に於ける奇蹟は、作中の人物と共に泣き、笑ひ、自他一如となれる作者の生活に於て、全く本質
的に許容せられたる奇蹟であつたに相違ないと思はれるのである。

夜半のねざめ・更級日記等にも、同じく夢と幻とが説かれる。青き月の光は、作中に屢々あらはれて、この二つの
作の夢と幻とを、いよいよ仄かに美しくする。中納言と、中君との淋しき戀は、かかる神祕なる豊けき感情に於て美

化された。物語と、夢と、幻とを思慕しつつ、あくまでも純なる生活を生活した可憐なる乙女こそは、我等の魂に死することなき、久遠の乙女である。

紫式部に於て、無意識的な漠然たる存在であつた「もの」は、今や更級日記に於て、明確な形をとつて、ありありと眼前に示顯した。孝標女に於ては、夢幻は即ち生活であり、生活は即ち夢幻である。紫式部を経て流れ來れる浪漫的精神は、孝標女に於て、その展開の頂點を示した。そは夏の日のもとに燃ゆるひなげしの如き紅である。

かくの如き浪漫的精神の發展には、その背後に淨土宗信仰と、藝術との影響のあつたことが容易に想像せられる。

天喜三年十月十三日の夜、作者の夢の阿彌陀佛の尊きみ姿は、霧ひとへ隔たれるやうに透かされて見えたが、それは「蓮華の座の上をあがりたる高さ三四尺、佛の御丈六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて、御手片つ方をば擴げたるやうに、今片つ方には印をつくり給へる」豊麗佛畫の如きみ姿であつた。思ふにそのみ姿は、彼女が恐らくは感涙の中に禮拜したであらう所の、鳳凰堂の扉及び壁面なる九品彌陀來迎の尊きみ姿や、石山・長谷・太榛等に參籠したる夕べ、ほの暗き内陣の奥に、ゆらゆらと御燈にゆれ、黙々として立ち給ふを拜み奉つたあのみ佛たちの神々しい御姿が、美しい幻となつて再現したものであらう。み佛こそは、彼女の思慕すべき永遠の男の子である。そは彼女に於てはあまりにも尊き戀心でもある。かくして、夢と幻とは、彼女に於ける必然的な生活そのものであつた。しかも、「こと人の目には見つけ奉らず、我れひとり見奉る」と云つて、その夢を人知れず秘めて守つた純情は、も早や彼女に於て夢と幻とが、單なる外面的な存在でなかつたことを示すものである。

和泉式部の戀愛希求の精神に發し、漸次母性愛へと深まり、更に紫式部の人間愛へと進んだ浪漫的精神は、孝標女

に於て、その發展の極限に達した。源氏以後、模倣の作品は少くないが、外面的なる人物の配置、筋の展開等への模倣は、深く我等の注意をうながすに足りない。我等の興味とする所は、むしろ生きたる人間精神の美しき流れである。この意味に於て、幻妖への文學は、更に新しく文學史的に考へなほされる必要があらうと思ふ。

以上我等は、平安朝に於ける第三期の文學的思想形態について少しくのべた。この第三期は、源氏物語を中心とする物語文學の流行をきはめた時である。後宮女流に於ける浪漫的精神が、夕榮の雲のまぶしさに似て輝いた時である。この時期は短くはあるが、また目ざましくもある。この時代は、精密に云へば自ら前後の二期に分れる。即ち一は、御堂關白の榮華を中心とする前半の時代であり、二は、頼通・教通等の所謂世繼を中心とする時代である。世繼の時代は、法成寺炎上を機會として、榮華がにはかに崩壊しはじめ、前九年の役の大亂によつて、やがて來るべき新興勢力が豫言される。なほ、この時期については、云ふべきことも多いが、他日にゆづる。

四 分裂の時代——文藝批評勃興の時代

——六條家を中心として——

この時期は、爛熟の頂點に達したる平安朝の貴族的文化が、自ら内面に頹廢を孕み、次第に分裂の過程を辿り、保元・平治の二亂によつて積年の襲弊を清算すると同時に、つひに崩壊瓦倒し、新たに武士文化の擡頭を招くに至る時期である。この時期は政治的には、後白河天皇の保元・平治を境として、それ以前、即ち白河・鳥羽兩皇の院政時代

を前期とし、それ以後、即ち後白河上皇（法皇）の院政時代を後期とすべきである。前期は、法皇を中心として、主として政治・宗教の分裂鬭争に向ふ時代であり、後期は、平清盛を中心として、主として政治・道德の破壊より新しき統一へと向ふ時代である。今この前後二期を表示すれば次のやうである。

(イ)前期——鬭争の時代（院政時代） 白河天皇延久五年（一七三三）より後白河天皇保元三年（一八一八）に至る。

(ロ)後期——破壊の時代（清盛時代） 二條天皇平治元年（一八一九）より安徳天皇壽永四年（一八四五）に至る。

今右の二つの時期を總括して、これに分裂時代といふ概括的な名稱を與へることは、妥當を缺くかも知れないが、文學的には、この二者の間に、さしたる重要な變化も認められないのであるから、今は假りに前後二期を一括して考へて見ることにする。

院政及び源平時代に於ける藝術方面の重要な特徴は、(一)勅撰集を中心とする和歌に革新の風の見えて來たことであり、(二)和歌を中心とする文藝批評即ち歌論の勃興して來たことである。しかして、かかる文學上の風潮を代表するものは六條家の學風である。

分裂時代の社會的精神は、前期に於て兆されてゐた文化の倦怠と頹廢とが、社會の各方面に互つて、益々濃厚になり顯著になつて、腐敗墮落に向ひ、そこから徐々に種々の形態をもつて、動きはじめるのである。その世紀末的な時代精神を分析すれば、おほよそ次のやうなものがある。

前期に於て、現實生活への享樂に向つた意志は、この期に於て、(一)頹廢を追ふ心となり、これが幻妖に向ふ精神と結合して、(イ)權威又は力の喪失となり、(ロ)グロテスクなものへの追求となり、更に華美に流るる精神と結合し

て、(ハ)肉感的な美への溺惑となつて、頗る不健全に陥つた。次に、前期に於て陰謀の暗さに向つた意志は、この期に於て次第に表面に浮び出で、明かに反抗の意志を示すに至り、こゝに、(二)對立に向ふ心となり、これ等は更に進んで實力による鬭争となり、つひに、(三)破壊に赴く心となつた。これ等は舊き文化が、全く統率の實力と權威とを喪失したるを意味する。次に前期に於て、華美を求めた精神は、この期に至つて、(四)驕奢を求むる心となり、一層その頹廢的性質を濃厚にした。次に、前期に於て博識と機智とに向つた精神は、この期に於て、新しき情熱を希求する精神と合流して、再び遠き平安朝初期の精神たる、(五)批判に沈む心へと復歸した。文學批評は即ちこの精神の下に生れる。又前期に於て、新しき情熱へと向つた精神は、この期に於て更に進んで、(六)平凡ならざる情熱の思慕へと發展し、歌壇に革新の風をもたらすに至つた。又前期に於て、繊細と幻妖に向つた精神は、この期に於て、前述の如き力の喪失——怯懦に陥る纖弱なる精神へと發展したが、一面には、全く反對の精神として顯現し、(七)猛き力を讚美する心へと發展した。これは、平安朝初期に於て、特に重要な精神であつた剛健と雄大を求むる心への復歸である。

右の如く、平安朝末期の主要精神は、種々雑多な形態のもとに顯現したが、これ等の中に、全然反對の傾向を取つて、舊き精神に復歸せるもののあるは注意せらるべきである。この精神復古の原因は、内外兩面から解釋せられるのが至當で、第一、文化それ自身の要求によるもの、即ち嘗て自己の所有せしものの喪失に對する無意識的なる惜慕の情——あたかも幼兒の純真に對するわれ等のなつかしみに似たる——に發するものとなすものと、第二、社會的原因によるもの、即ち文化が社會的なる他の原因によつて、當面の必要となすが故に要求せられたるものとなすものと、

兩様の解釋が可能であり、しかも、この場合は兩者とも肯定せらるべき解釋であるやうに思ふ。

社會的現象としての文學的思想形態を、單一なる本質に還元することは不可能である。上述の主要精神は、常に他と結合離散しつゝ、複合體として顯現するのである。

一、**頹廢を追ふ心**——承保元年、宇治關白頼通の薨去は、御堂殿榮華の苑に立ちそめた秋風である。一葉は落ちて、天下の赴く所をつげた。まことに歌人頼通の死には秋草の淋しさがある。御堂殿の文化は、この世繼を失つて、益々頹廢に向ひ、形骸となつて「時」の流れに浮沈した。

(イ)權威又は力の喪失——平安朝初期の佛教の著しい特質は、南都北嶺の學者たちの尊い求道の熱情と思索的努力とであつた。しかるに、今や宗教の本義たるべき哲學的批判の精神は、山門・寺門の衆徒から消失した。佛教の本質は誤られ、權威は失はれた。迷信的佛教が、天變・地異・疾病・兵亂の度毎に、禁中又は諸國に於て讀經・修法・加持・祈禱を行ひ、國家鎮護の功を誇るに至つたのは、佛教の墮落である。彼等が進んで世俗的なる野心を遂げんがために、甲冑を備へ兵仗を蓄へ、信仰の美名にかくれて、強暴なる直接行動に出づるに及んで、宗教それ自身の威信と實力とは全く地に墜ちた。當時賦役をのがれて剃髮染衣の姿となれる浮浪の徒は、延曆寺・興福寺・圓城寺・熊野等に集まり、神威にかくれ、衆を恃んで強訴すること屢々であつた。この事實は、日本宗教史上に残された不祥なる汚點である。暴力による直接行動は、崩壞過程に在る文化の持つ不健全なる病的現象である。

迷信的佛教の流行は、上下に行はれたが、白河法皇及び鳥羽法皇の崇佛はその代表的なものである。白河法皇は、五千數百の佛像を造り、五千數百の佛畫をゑがき、四十數萬の堂塔を建て、前後四度び高野に、八度び熊野に幸し、

且つ天下に令して殺生を禁じ、漁網八千八百餘を焼かしめ、諸國の貢魚を停め、國用窮乏を告げたため、つひに官職を賣買せしめ給ふに至つた。又、鳥羽法皇は、財政大いに困乏せし時にかゝはらず、法勝寺・尊勝寺・嚴勝寺・園勝寺・成勝寺・延勝寺の所謂六勝寺を建立せられた。かくの如き外面的佛教の尊崇は、佛教それ自身の權威の喪失を物語るのである。又この頃から、雜藝の諸道が分裂し、説經・法談等は次第にかたりもの、的傾向をとり、琵琶法師・田樂法師の如く、法師にて遊藝人となるものも少くなかつたらしい。これ等は必ずしも宗教の名譽ではない。なほその他社會のあらゆる方面に互る權威の失墜は、この期に於て特に著しくあらはれたが、それ等は項をかへて詳説する。

(ロ)グロテスクなものへの關心——獵奇的な精神は、頹廢的文化の末期に於て發生し易い。平家物語の中に物語らるる奇怪なる事實、今昔物語に取扱へる無數の奇蹟・妖怪・宿報等の獵奇談には、いづれもこの精神の發現せるを見る。又カリカチュアとしての鳥羽僧正の鳥獸戲畫、病の草紙・餓鬼草紙・地獄草紙・吉備大臣入唐繪詞等の如き繪卷物の中にも、かかる時代精神の反映を指摘し得られるかと思ふ。

(ハ)肉感的な美への溺惑——繊細なる美的享樂は、白河法皇の治世に於てその極に達し、かの白河の花の宴に於ける華奢に至つては、つひに後人の嘲笑を招くに至つた。鳥羽法皇は左大臣源有仁と心を合せて、容儀をつくらひ、華美を獎勵し給ひ、その爲に公卿は眉をそり、黛を施し、白粉をぬり、齒を黒め、紅をつけ、全く女子と同様の容姿・化粧を誇るに至つた。淫蕩遊逸の風は、この時より甚しい時はない。かくの如き男性の女性化は、肉感的な美的享樂を追ふ心の所産である。紅粉・翠黛は、女子のたしなみにあらずして、男子のたはむれとなつた。平家の滅亡は、その若き公達が、かかる頹廢的なる美的享樂に生きてゐたからである。又同様の精神は、とりかへばや物語の構想及び

官能描寫の中にも見られるのである。

男性の女性化は、女性の男性化の原因ともなつた。最も代表的なものは、白拍子である。白拍子は遊女の一種であつて、鳥羽帝の頃より世に行はれ、初めは白き水干に立烏帽子を着し、白鞘卷の太刀を佩き、高貴の前に出て舞つたので男舞とも云はれたものである。白拍子は、不健全なる頽廢感情の所産であつて、こゝにも文化衰亡の前兆を見るのである。なほ歌合の如きも、平安朝初期に於ては、きはめて眞面目なる遊戯であり、かつ教養であつたにかゝはらず、堀河院に於て艶書合の行はるるに至つて、頽廢その極に達した。これは、艶めかしく戀文の文辭の巧劣を競つたもので、計畫それ自ら已に不健全である。なほ、おそく、つの繪の如きものも、この頃から世に行はれ、天下をして益々淫靡ならしめたではないかと考へられるのである。

二、對立に向ふ心——前期に於ては、權力の抗争は、陰謀となつて社會の裏面に潛入した。しかるに、この期に於ては、勢力の鬭争は、堂々と表面にあらはれてきた。これは、一面統率者たる藤原氏の威信の失墜したことを證明する。尤もこの權力の抗争は、已に平安朝中期、藤原氏の權力の最も確立した時代にも無いことはなかつた。平將門の亂即ちこれである。將門は攝政忠平に請ひ、檢非違使たらんとして許されず、固定せる藤原氏の文化に對して一石を投すべく、歸つて伯父國香を殺し、坂東を押領し、みづから新皇と稱し、僞宮を下總に營み、百官を定めるなど、その行爲は別として、倦意を打破せんとする革新的意氣には、愛すべきものがある。この天慶の亂は、藤原純友の亂と相まつて、遷都後百餘年の間兵革を知らざりし人々を驚倒せしめた。

その後、新羅・高麗・刀伊の賊が、西海を侵すこともあつたが、國家的な關心とならず、後平忠常の亂・安倍頼時・

貞任父子の亂・清原武衡の亂等も、亦太平の夢になれた藤原氏に取つては、さしたる大事件とされなかつた。しかるに、當時は六衛も追捕使も、京師の盜賊を鎮むる力なく、これ等の亂の平定には主として源平二氏が當つた。即ち將門の亂は平貞盛、純友の亂は源經基等が平定した。こゝに於て源平二氏は相前後して鎮守府將軍に任ぜられ、各々弓馬の道に剛勇の譽があつた。後、忠常の亂は源賴信、前九年の役は源賴義・義家、後三年の役は義家がこれを平定して、東國の民心ををさめ、平家は、忠盛に至つて南海・山陽の盜賊を討つて昇殿を許され、爾後二氏對立して、延曆寺・興福寺等の衆徒の暴動を防いで功があつた。こゝに至つて、藤原氏に對立する勢力として、源平二氏の武門の基礎が確立した。實に法成寺炎上後五年、鶴岡八幡官の造營は、武士的文化の誕生を象徴するものであつた。

次に、京都と地方との對立に關して、先づ莊園制度の發達について考へて見る。莊園とはもとは別莊といふが如き意味であつたが、後墾田の私有を許され、これに功田・賜田・社寺の寄附田等の私有田を加へ、これ等を總括して與へられた名稱である。班田收授の法は平安朝に至つては行はれず、國司・郡司の苛政に堪へず、課役を免れんとて僧又は盜賊となつた者は、莊園に集つて郎黨となり、莊長・莊司等の支配を受け、所有主領家によつて統率せられた。多くの名田を私有せる豪族は、家の子・郎黨を養ひ、武力を蓄へ、國司の命に従はず、朱雀帝の頃、これ等の者が押領使に任ぜられた事があつて、益々勢力を得、次第に大小名・高家などといふ階級を生じ、つひに武士社會確立の端を開いた。

かく領家・莊司などの勢力増大するに及んで、國司は地方人を代官・目代等に定め、自らは都に留つて、任國に赴かざるに至り、地方は完全に中央政府から獨立した。それ等の豪族中、最も勢力を占有したのは、平氏（北條氏伊豆・

三浦氏^相・秩父氏^武等、清和源氏（新田氏^上・足利氏^下・武田氏^甲・逸見氏^信・佐竹氏^常等）藤原氏（伊達氏^隆・佐野氏^野等）等であつて、これ等は、朝廷の命を奉じて兵亂鎮護にあたる武將を助け、武將も亦私財を分つて恩賞を施し、ここに自ら主従的感情を生じ、服従・勇武・節操・廉恥・信仰を中心とする封建的思想形態の形成をうながすに至つた。後三條天皇は、記録所を設けて莊園を検し、國司の重任を禁じ、鳥羽法皇は、諸國の武家の源平二氏に従ふを制へ、にはかに中央集權の實をあげんことを計られたが、それも結局時代の趨勢に反抗せる企として失敗した。

綱紀肅正し、政令行はれたる時代にあつては、諸國の莊園は、藤原氏の榮華を支持する便利なしかも貴重な財源であり得た。然るに、一朝政紀弛み、威令行はれざるに至つては、莊園は單に貴族の榮華を保持する財貨の流通を杜絶せしめたに止まらず、貴族等をして自己の無力を暴露し、威信を天下に失墜せしむる原因となつた。武力と財政と警察との三權を完全に地方に奪はれた中央政府は、今や徒らに美衣をまつて床上に踞る木偶に過ぎない。地方と中央政府との明白なこの對立は、舊文化の没落を意味すると同時に、新興勢力の擡頭を物語るのである。

上述の如く、地方對京都、貴族對武士の二大勢力が對立し、そこに藤原氏を中心とする貴族文化の分裂が具體的に示されたが、この傾向は更に擴大して社會の各方面にあらはれた。即ち（一）皇室の分裂、（二）貴族相互の分裂、（三）武家相互の分裂、（四）宗教の分裂、（五）學問及び藝術の分裂これである。

先づ官廷について云へば、白河帝は應德三年^{四七}中宮に死別せられ給へる後益々佛法に傾き、天位を堀河帝に禪り、落飾して法皇となり、閑院の御所に院司を設け、大別當・執事等の職を定め、北面の武士を置き、院政を布告せしめられた。かくして、院宣は勅命に等しき重さに於て發せられ、爾後、鳥羽・後白河兩法王に互る變態的政治としての

院政が開始せられた。この政治上の病的な分裂は、當時の社會精神の一面を最もよく物語るものである。ことに、崇徳帝と鳥羽法皇、後白河帝とに於ける政治上の御不和の如きは、その間織たる女性の聯關せる醜き鬭争であり、つひに保元の亂を導くに至つた。又二條帝の朝に於ける重臣藤原通憲と、院の寵臣藤原信賴との抗争の如きも、朝廷と仙洞との不健全な對立に原因し、つひに平治の亂を導くに至つた。

次に貴族間の對立として顯著なるは、關白藤原忠通と弟賴長との對立鬭争である。この醜惡なる骨肉の分裂・對抗は、皇室の御争と合流してつひに保元の亂を起すに至つた。又武家としては、爲義と平清盛との對立が、皇室及び藤原氏の分裂と結合して、先づ保元の亂を起し、清盛と義朝との對立が、後に平治の亂を起すのである。

これ等の分裂對立は、前期に於ては、隱險なる策謀へと向ふ傾向に在つたが、この期に於て、堂々と表面に出で、つひに武力と結合するに至つたことは、政治的に無力となつた後宮權威の没落を示すもので、甚だ興味ある事實である。なほこの間に女色があり、嫉妬があり、私利・私慾があり、父子・兄弟の敵視があり、眞に醜惡きはまるもので、こゝにも風教・道德の分裂と頹廢とが見られるのである。

次に宗教に於ては、教旨に對する論難攻撃はなく、むしろ、宗教を墮落に導く如き世俗的勢力に對する鬭争が生じ、延暦寺と圓城寺、興福寺と多武峯、興福寺と東大寺、延暦寺と興福寺、東大寺と藥師寺等、互に兵を構へて攻略を事とし、ほとんど天下寧日なき有様となつた。又、學問及び藝術の方面に於ては、後拾遺集に對する難後拾遺があらはれ、古調を尙び平板に流れる藤原通俊の歌風と、新しき感情を希求し新體に走らんとする源經信の歌風との對立が生じた。又、經信の子俊賴が、白河法皇の院宣によつて撰したる金葉集にも、臂突集の如き異名を與へて非難する者も

あらはれ、藤原基俊の如き雅正を尙ぶ保守派に對して、俊賴の如く奇矯を重んずる新派の對立も生じた。又藤原顯輔が、崇徳上皇の仰せに依つて擧進した譚花集の如きも、先づ藤原教長の拾遺古今、長門前司爲經の後葉集等によつて對立的抗爭を生み出し、顯輔の子清輔は、牧笛集を作つて、是等の對立に對して更に對立した。

上述の如く、平安朝末期の文化は、分裂より對立へと向つて、つひに混亂したが、猛火と弓箭の中から、早くも新しい文化の萌芽は見られた。それは對立を克服して統一へと向ふ意志である。これは政治史上には清盛の、一時的統一の後、賴朝の覇業が完成し、文學上には、千載集が出でて、後拾遺・金葉・詞花を統一する幽玄體の確立することを意味する。實に賴朝と俊成とは、分裂したる平安朝文化の統一者であり、しして同時に鎌倉時代文化の創設者であるとも云へるであらう。

三、破壊に赴く心——對立の進み行く所には必ず破壊が伴ふ。この期に於ては、社會の各方面に互り、舊きもの一切に對して猛烈なる破壊が企てられた。しかしこの期に於ての破壊は同時に建設でもある。この精神を代表する人物として、革命兒平清盛がある。

清盛は因襲に向つて斷乎たる破壊を企てた。彼が六波羅に廳を置くや、從來の朝儀公例には一顧の價値も認めず、攝政關白以下の門閥に對して、恣まに職を奪ひ、領地を掠め、密偵を京中に放つて平家の政策を難する輩は一々之を捕へて處刑した。かかる武斷的恐怖政治は、過去の文化に、未だかつて存在せざりし所である。彼が斷乎たる注意をもつて天子を幽閉し、國をあげての反對怨嗟の中に、敢然として福原遷都を斷行したるが如きは、行爲の是非は措いて、その意氣には壯とすべきものがある。彼はまた宗教の方面にも、革命家的な極端な彈壓を加へ、伊勢神領に課税

し、その子重衡は興福・東大の二寺を焼くに至つた。彼が太政大臣となつて政を擅にした時には、一族六十人高官に連り、所領の莊園實に三十餘國に跨つた。

舊制破壊の精神は、階級制度に最もよくあらはれた。先づ名字の制は當時、官職の名をとつて自己の名とすることが流行した。大夫・衛門・兵衛等の名は、舊くはその官にあらずしては稱することの出来なかつたものである。主の如きも、かつては王孫に限りて用ゐられた名であるが、この期に至つては臣下の小兒の幼名にまで用ゐられた。又從來、藤原氏一門に固定しつゝあつた社會的地位も、この期に至つて一般民衆に解放せられた。即ち、布衣匹夫と雖も一旦戰場に従つて勳功があれば、遽かにあげて高官に拔擢することも出来た。又奴婢と稱する下層階級の賤民は、所謂良民と婚を通ずることの出来ない制であつた。この頃から全くその區別なきに至つた。又人倫道德の破壊も、この時期に於て最も甚しく、三歳の天子に六歳の太子があり、一人にして二代の中宮となれる婦人があり、刑場に父を誅した不孝の子のあるが如く、道義は全く破壊されるに至つた。かく平清盛によつて破壊された社會は、平家覆滅の陰謀によつて更に破壊せられ、つひに源頼朝の大破壊によつて、こゝに中世的日本が新生した。清盛の破壊は、かく一種悽愴の氣をもつて斷行されたが、その政策の根本には、なほ藤原氏の文化の模倣があつた。清盛の關心は、宮廷的勢力の擴張にあつて、武力・財政・警備の三權の地方的確立を意としなかつたことが、その政策破壊の最大原因をなすのである。

四、驕奢を求むる心——枯渴し腐敗せる内面を粉飾せんとする外面的な努力は、先づ豪華を求むる心へと進むのは當然である。白河・鳥羽兩朝に於ける頹廢的な驕奢については前述の通りである。武人としての清盛の生活には、力

の發現としての豪華があるが、その精神は清原清衡の生活にも同様に見られた。西八條に於ける入道相國の榮華、平泉に於ける三代の榮耀等には、なほいづこかにひめられたる、「力」が見える。しかし、社會の全般には已にこの「力」はなく、ただ徒らに纖弱・華麗が見られるのみであつた。女子にせまほしき平家の公達によつて、この時代精神は代表せられるのである。

厨子を大きくしたやうな金色堂の纖麗、嚴島神社に於ける繪畫的な優艶、そこには、平安朝末期の精神が、浮彫のやうに現はれてゐる。醍醐寺藥師堂・春日若宮神樂殿の勾配の優美にも、この精神が見える。阿彌陀堂本尊像大山寺藏、阿彌陀如來像法金剛院藏の蓮座、千手觀音像峰尾寺藏の光背、一字金輪像中尊寺藏の天蓋、聖德太子像法隆寺藏の衣文等に見える眩しいやうな纖巧、二十五菩薩來仰圖富貴寺本堂の壁畫、來迎彌陀圖長谷寺藏等の華麗、血曼荼羅信野山藏、嚴島經卷口繪・扇面寫經四天王寺藏の纖美、源氏物語繪卷に於ける眠れるが如き靜けさ、その繪詞傳伊房筆、大内切傳公任筆藍紙本萬葉集等に見える線條の優美、中尊寺金堂内部の華曼・幡頭の裝飾、嚴島寫經の裝飾、篋の透彫等の妖艶纖美、後拾遺集の形式に於ける技巧的纖細、基俊の歌に於ける麗緻、輔顯の歌に於ける纖巧、いづれも、この時代の精神を反映したものと思はれる。

五、批判に向ふ心——批判を求むる精神は、先づ文學理論としてあらはれてゐる。通俊の後拾遺問答經信の難後拾遺抄、俊頼の無名抄、清輔の奥儀抄・袋草紙・和歌初學抄、顯昭の萬葉集難事・袖中抄、俊成の古來風體抄等がこれである。又、同様な精神は、古典の學術的研究としてもあらはれた。例へば、仲實の綺語抄、範兼の和歌童蒙抄、教長の古今集註、顯昭の日本紀歌註・古今集序註・拾遺抄註・散木集註等その代表的なものである。又この精神は分類學又は目錄學として、通憲の法曹類林・仲實の古今集目錄、敦隆の類聚古集・萬葉集目錄古今集序註引抄・和歌類林明許詳、

範兼の和歌童蒙抄、著書不明なる和歌現在書目録を起した。これ等の目録學及び分類學の對象が古典特に萬葉集と古今集とに集中されたことは注目すべきである。なほこの時期に於ける最も輝やかなしい特徴の一として、かかる靜かなる批判に沈む學究的精神が、戰亂の中に誕生し發展したことを數へ得るのは、文學史家の深き喜びであらう。

同様の精神は、文學の方面にもあらはれた。それは歴史的文學と、説話文學と、歌謡とに於てであつて、いづれも分類的・類聚的・集成的態度のもとになされたが、その背後を貫いて、高き批判的精神が輝いてゐたことは云ふまでもない。歴史的文學としては、日記・記録・家集等によつて類聚したるが如き榮華物語が出で、御堂關白の榮華とその世繼の治世とを批判した。大鏡は、その批判的態度を益々濃厚にし、戯曲的構想によつて、辛辣に藤原氏の文化を是非した。今鏡にも亦同様の精神が見える。次に、説話文學としては、今昔物語が集大成された。これは、最も廣汎なる空間と時間とに互つて、現實的なるもの、事實的なるもの一切を類聚し集成したもので、和歌童蒙抄等の撰述態度と全く同一の精神の生む所である。寶物集・袋草紙等には、匡房の傀儡子記・遊女記・江談抄等の如く、博識を欲する精神も動いてゐるが、それよりも一層現實批判と思索との意志が強烈に働いてゐると思ふ。歌謡の方面には、梁塵秘抄があるが、これも、分類・集成の意圖のもとに成つたものである。

この時期に於ける批判的精神は、過去の事實へと向つた。この學術的な分類・集成の意識こそは、哲學的思索への準備であつた。ことに分類意識は、古今六帖・倭名類聚抄等より發展して、色葉字類抄に至り、國民の思想内容に或る決定的な體系を與へたものであつて、この時代にかかる精神が最も濃厚であつたことは、種々なる意味で注目に値する。しかし、かかる批評的精神を文學的に統一せしめたものは、實に清輔顯昭等を中心とする六條家であつた。

六條家こそ、この時代を代表すべき大いなる存在である。

六、平凡ならざる情熱への思慕——類型の殻を破らうとする新しい感情の動きは、この時期に於ても見られた。それは先づ和歌に於てあらはれた。自然の中に逃避して、純粹なる哀傷を求めようとした西行、幽寂の世界への遠き憧憬に生きた經信、革新の靄氣に燃えつゝ、因襲に向つて大聲叱呼した俊賴、實感の心と清新なる歌調とを求めて戦つた顯輔、これ等の歌人の閱歷作歌の中には、舊き感情の類型から新しき感情の建設に向はんとする強き熱意がある。又、讚岐典侍の如く、すべての外面的な虚飾をはぎ、その奥に眞の人間の姿を眺めることから、はじめて、さめざめと涙することの出來た個性もあつた。要するにこの時期は、千載集・新古今集に至つて完成せられる幽玄の精神が、種々なる因襲と戦ひつゝ、苦悶の中に徐々として成長してゐた時期であるといふことが出来るであらう。

七、猛き力を讚美する心——人心が繊細華麗に陥り、怯懦なる迷信が社會の上下に擴がり、兵亂・強盜の出發が甚しくなると、猛き力が要求せられはじめるのは當然である。保元物語に於ける爲朝、平治物語に於ける義平は、各々二つの物語の主人公として、猛き力を求むる時代人の精神を象徴してゐるかに思はれる。羅城門の鬼、禁裡の鶴、月の夜の強盜、これ等は、猛き武士の力によつて退けられた。みはかし・鳴弦・虎等の威力は、この時代の人心を統率する一つの力でもあつた。我等はかかる精神を、軍紀物語の華やかなる戰鬥描寫に於て、今昔物語の種々なる武勇傳説に於て見出す。將門記に於ける文體、志貴山縁起・伴大納言繪卷に於ける筆力、元永本古今集、天治本萬葉集等の草假名に於ける筆意の強さの中にも、同様に見出すことが出来ると思ふ。又己が姓名の上に「惡」の一字を附して、惡源太・惡七兵衛等と稱するが如き風習の中にも、この時代精神の顯現を見る事が出來ようと思ふ。

以上平安朝第四期の主要なる思潮について考察を試みた。これ等の對立・分裂・頹廢は、平家の公達によつて、華麗なる衣のかけにかくされた。榮華わづかに十年、彼等はこの虚飾のまゝに、はかなき幻を追うて西國のはてに流浪した。しかし、そこには、滅亡の海が擴がるばかりである。長い間、後宮に生れ、そして後宮に發達した浪漫的文化は、この海にして、崩るるが如くあまりにもはかなく没落した。大きな日輪が海の彼方に落ちて、やがて思想界にほの暗い夜が訪れるまで、宮廷文化の殘照は、一抹の紅を點じて大原の空をそめた。それは寂光院に於ける女院徳子の寂しい生涯であり、建禮門院右京大夫集に於ける哀韻切々として胸をうつ餘情である。

附記——本稿の目的は最初斷つておいた通り、平安朝時代に於ける文學思想の形態を、社會的に考察するに在つた。しかし、與へられたる紙面に於ては、たうていその全部をつくすことは出来なかつた。ことに本稿は、筆者病中、編輯者の指令に従つて無理を押しつゝ短時間に整理したもので、誤謬の見解、未熟の説も亦少くないであらう。すべてそれ等は他日の増補訂正に俟たねばならぬ。